



# 自分自身の在り方・生き方を考える道徳教育

—人間（自分自身）の弱さを見つめて—



川崎市立はるひ野小学校

教諭 稲垣 彩



埼玉県  
SAITAMA



埼玉県北部

埼玉県東部

埼玉県西部

埼玉県南部

小学校8年間  
中学校2年間

4年間

上里町

神川町

美里町

深谷市

本庄市

熊谷市

行田市

羽生市

加須市

長瀨町

寄居町

皆野町

小川町

滑川町

鴻巣市

久喜市

幸手市

東秩父村

嵐山町

吉見町

白岡市

杉戸町

小鹿野町

東松山市

北本市

桶川市

伊奈町

宮代町

横瀬町

ときがわ町

鳩山町

坂戸市

川島町

上尾市

小学校8年間  
中学校2年間

秩父市

飯能市

越生町

鳩山町

坂戸市

川島町

上尾市

さいたま市

越谷市

毛呂山町

錦ヶ島市

川越市

日高市

ふじみ野市

富士見市

志木市

川口市

三郷市

狭山市

三芳町

朝霞市

戸田市

八潮市

入間市

所沢市

新座市

和光市

# 1、研究目的

はじめに　－問題の所在－

「私は、弱い人間だ。」平成28・29年度、中学校教員としての経験を積んでいた2年間。何事もくじけずに、強く生きることがよりよく生きることだと信じていた私の価値観が大きく覆された。しかし、こんな「弱い」自分でも、よりよく生きていきたいと願っていることに気付く。

本研究では、「人間の弱さ」とは何かを教育哲学・教育人間学の視点から考察し、「弱い人間」が豊かに生きていくための生き方を見つけていく。さらに、現在私自身が教団に立っていることから、自分自身の新たな教育観を見い出すとともに、「人間の弱さ」をどう道徳科に生かしていくかを探求していく。

# 2、研究方法（参考文献）

## 第Ⅰ章 「人間の弱さ」についての認識

- ・高山 岩男（1975）『教育哲学』、玉川大学出版部
- ・水野治太郎（1996）『弱さに触れる教育』、株式会社ゆみる出版

## 第Ⅱ章 自己と他者・集団との在るべき存在

- ・井出 元（2011）『人生に生かす老子』、致知出版社
- ・岸見一郎・古賀史健（2013）『嫌われる勇気 自己啓発の源流「アドラーの教え」』ダイヤモンド社
- ・小西 正雄（1995）『「戦後民主主義」と教育—呪縛を解く』、明治図書刊
- ・下程 勇吉（1970）『宗教的自覚と人間形成』、広池学園出版部
- ・道德教育学フロンティア研究会（2021）『道德教育はいかにあるべきか 歴史・理論・実践』、ミネルヴァ書房
- ・中山 理（2021）『人生100年の時代を楽しむ技術』、育鵬社
- ・ブレナー・ブラウン著書（2013）『本当の勇気は「弱さ」を認めること』、サンマーク出版
- ・行安茂・廣川正昭編者（2012）『戦後道德教育を築いた人々と21世紀の課題』、教育出版

## 第Ⅲ章 道德科で扱う人間の「弱さ」

- ・国立教育政策研究所教育研究情報データベース、学習指導要領データベースインデックス
- ・『小学校学習指導要領解説 特別の教科道德編』（2017）、文部科学省
- ・『中学校学習指導要領解説 特別の教科道德編』（2017）、文部科学省
- ・『みんなの道德6年』（2019）、学研教育みらい
- ・『みんなの道德2年』（2019）、学研教育みらい



# 2、研究方法（引用文献）

## 第Ⅰ章 「人間の弱さ」についての認識

- ・水野治太郎（2013）「＜学術大会基調講演＞愛のナラティブ実践」、『上智人間学会人間学紀要42号』
- ・水野治太郎（2005）「公共世界におけるケアの人間学：「かかわり」と「つながり」」、『上智大学一般教育人間学研究室人間学紀要35号』

## 第Ⅱ章 自己と他者・集団との在るべき存在

- ・岩佐信道（2020）「つながるいのちの豊かさのためにー「三方よし」の道德性発達論の展開ー」、『麗澤道德教育学会道德教育学研究第1巻』
- ・姜信善・清沢彩夏（2016）「挫折体験のとらえ方が個人に及ぼす影響についての検討」、『富山大学人間科学部紀要第11巻2号』

## 第Ⅲ章 道德科で扱う人間の「弱さ」

- ・朝倉充彦（2018）「いじめ問題を主題とする道德教材についての考察」、『東北福祉大学教職課程支援室教職研究第2018巻』
- ・笠井稔雄（2012）「人間の弱さへの共感を重視した道德の授業：価値の主体自覚を目指す指導の困難さを克服する一つの方略」、『北海道教育大学紀要（教育科学編）第62巻 第2号』
- ・小池順子（2008）「子どもが「自分らしさ」を追求する道德の授業」、『千葉経済大学論叢38号』
- ・小林相・田代直弘（1990）「「道德の時間の」の構成への一考察」、『茨城大学教育学部紀要教育学第38号』

# **3、論文構成**

はじめに　－問題の所在－

## **第Ⅰ章 「人間の弱さ」についての認識**

第1節 高山岩男における「人間の弱さ」

第2節 水野治太郎における「人間の弱さ」

## **第Ⅱ章 自己と他者・集団との在るべき存在**

第1節 人間の「弱さ」と自己理解

第2節 人間の「弱さ」と他者・集団との関係性

## **第Ⅲ章 道徳科で扱う人間の「弱さ」**

第1節 学習指導要領における人間の「弱さ」の位置づけ

第2節 人間の「弱さ」とは何か

第3節 人間の「弱さ」を直接的に扱う授業

第4節 人間の「弱さ」を包括的に扱う授業

おわりに　－研究の成果と今後の課題－



# **第1章 「人間の弱さ」についての認識**

## **第1節 高山岩男における「人間の弱さ」**

- 1-1 高山岩男における教育観
- 1-2 高山岩男における「人間の弱さ」
- 1-3 不完全な人間であっても道德教育は可能であるという確信
- 1-4 道德教育が現実に成立する条件
- 1-5 学校における道德教育の主眼
- 1-6 学校における民主的な道德教育の在り方
- 1-7 教師・教育者の倫理
- 1-8 生涯を通じて自己教育に精進する義務

## **第2節 水野治太郎における「人間の弱さ」**

- 2-1 水野治太郎における弱さの定義
- 2-2 強さと弱さの関係性
- 2-3 弱さが強さに転じるとき
- 2-4 日本人のがんばり意識
- 2-5 弱さに対する価値観の転換
- 2-6 弱さに備わる意味
- 2-7 人間の弱さの分類
- 2-8 弱さの受容（ケアの成立）
- 2-9 「やさしい社会」の形成
- 2-10 弱さを乗り越える強さ

# **第1節 高山岩男における「人間の弱さ」**

高山岩男（1975）『教育哲学』、玉川大学出版部

## **【第1章】教育とは何か**

教育というものは人間の存在と不可分に密着した現象であり、人間は教育によって人間になり、教育がなければ人間は人間にはなれない。

教育という現象は、根源的なもの。教育は、すでに成長している人間が、成長途中にある人間に対して行う導き。

**人間は、誰もが不完全である。**

**よって、人間が人間に行う教育も不完全である。**

## **【第九章】道徳教育の諸問題**

道徳教育は、聖人君子のように完全円満な道徳的人格者のみが行うべきものである。しかし、近代の学校組織の中の教師はこのような道徳的人格者ではない。

**学校教育で道徳は不可能である。**



# 第1節 高山岩男における「人間の弱さ」

**不完全な人間であっても道德教育は可能であるという確信**

どの時代においても知識や技能を教える教師は人間として不完全であり、未完成であることは免れない事実である。よって、教師が完全円満な道德的人格者でなければならないという前提が間違えとなる。

ここでの問題は、不完全な人間を否定することではない。

<道德教育が成立する条件>

**本質的対等性と現実的経験の非対等との二要素によって成り立つ**



# 第1節 高山岩男における「人間の弱さ」

< 学校における道徳教育の主眼 >

道徳的判断力の育成を目指すこと

道徳的判断力は、是非善悪を弁別する判断力につながるもの

是非善悪に迷うのは、人間の常であり人間に本質的なもの。常に迷わずに、過たぬ判断を下すことは人間には在り得ない。よって、人間の道徳的生活には、**義務の闘争（義務の葛藤）**が避けがたいものとして存在する。

ここでいう**義務の闘争（義務の葛藤）**は、義務と欲望の争いではなく、**道徳理性そのものの内部葛藤、つまり道徳的理性の自己分裂を意味する**。2つの正しい義務に迷うことは、道徳理性の絶望に追いやられる深刻な事態であり、道徳の限界をも意味する。この解決できない深刻な問題を古来「悲劇」と呼んでいる。人間は、この悲劇を避けることはできないからこそ、学校教育でも何らかの形で反映させるべきであると指摘している。

# 第1節 高山岩男における「人間の弱さ」

## <学校における民主的な道徳教育の在り方>

道徳的判断力を育成する教育的方法について以下の3点を挙げている。

### (1) 一般的方法

一般的な倫理や道徳律を教える方法。ここでいう一般論は、倫理学や哲学を意味する。

### (2) 歴史的方法

実例を教える方法。

### (3) 類型的方法

歴史上の実例から諸種の典型的な例を選択し、個別の実例に即して一般律を教える方法。一般を個別に表現するものであり、現実の事実が個別でしかも一般を代表するもの。

上記の3つの中で最も効果的な方法は、(3) 類型的方法である。なぜなら、**道徳的判断力は悪徳や不徳の典型的なものによっても育成されるもので、必ずしも有徳善行の例のみに限るものではないからだ。**



## 第2節 水野治太郎における「人間の弱さ」

水野治太郎（1996）『弱さにふれる教育』、株式会社ゆみる出版

### 【第1章】人間の弱さにどう向き合うか

『広辞苑』（岩波書店）における「弱さ」の定義を参照する

**「弱し」** ①力が少ない。強くない。②欠点である。③意思が堅固でない。心がしっかりしていない。④すこやかでない。健康が衰えている。

**「強し」** ①力がすぐれている。勇猛である。②丈夫である。すこやかである。気丈である。屈しない。きつい。④堅固である。ゆるみがない。⑤きびしい。激しい。⑥はなはだしい。程度がすぐれている。



弱さ自体の内容は、全て否定的で消極的な意味しか与えていない。

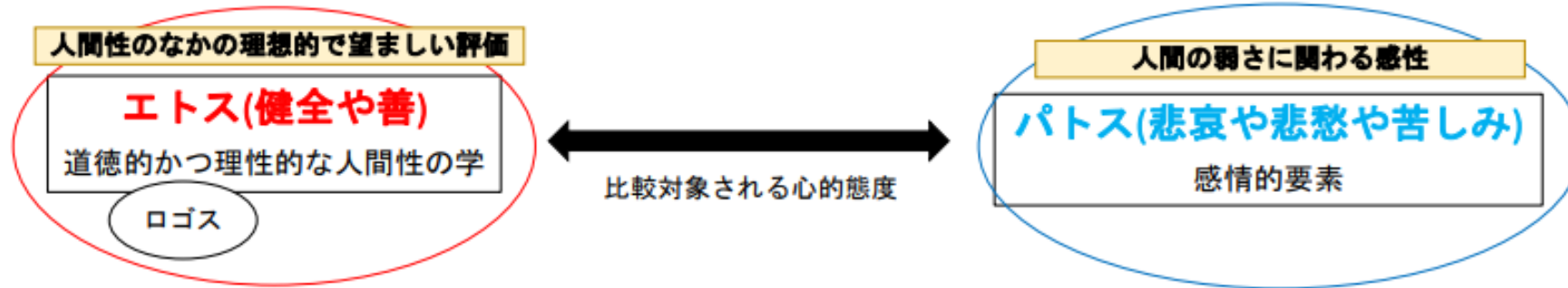
加えて、弱さは生命力の弱さも表現している。

いずれにしても、弱さの長所を伝える意味は含まれていないことから、

**弱さをどう扱ってきたかという社会意識、  
社会現象としての特徴を問題視する必要がある。**

## 第2節 水野治太郎における「人間の弱さ」

<弱さが強さに転じるとき>



弱さが強さに転じるときは、**受苦のあとの後悔や罪悪感がバネとなって**さらなる高次の知に到達させてくれるとき。



「人間の弱さに向き合い、弱さを乗り越える適切な処置や援助活動を行う。しかし、それがうまくいったときよりも、処置や援助が効果を発揮しなくて**悔いを残した方が、その後の望ましい人間関係に大きな方向づけとなる**ことがある。さらに、**マイナス感情から転じて、その後の自己のあり方や関係性に広がりを見せる**とき、一つの価値を担うことがある。」

**しかし、なぜか人は苦しみや弱さに否定的であるという点から、日本人の弱さへの意識を理解する必要がある。**

## 第2節 水野治太郎における「人間の弱さ」

### <日本人のがんばり意識>

日本は、世界一の長寿国でありながら、  
日本の老人は長生きを喜んでいるようにはみえない。



社会の生産活動に貢献できる壮年を理想とするエリート主義が支配している。そこから、本来ならば、「若さ」「強さ」「健康」とは正反対の「老いる」「病む」「死」などの豊かに受容する文化（=弱さを受容する文化）が広がっていくはずが、  
最近の日本には人間の弱さを受容する精神文化が欠如している。

日本人のがんばり意識

- (1) 激しい競争社会であること
- (2) 自助型の社会であること
- (3) 欲望充足の体質をもっていること

**競争社会にあってもなお、  
どこかに精神の安定を得られる社会にすることが必要で、  
その社会づくりが弱さへの視点を変える扉を開く。**



## 第2節 水野治太郎における「人間の弱さ」

<弱さに対する価値観の転換>

**従来と異なった人々と付き合っていくことが大切**

従来と異なった人々…高齢者、病人、人生を失敗して苦悩している人  
死に直面している患者、効率主義原理とはほど遠い人々



人間としてキラリと光るものがあることを見出す。  
これこそが、「弱さにふれる教育」であり、  
日本人のがんばり意識とは反対の教育になる。

**学校現場で起きているいじめなどは、子供たちに苦の体験が少なく、  
自分や他人の失敗、弱さを受容できない体質が育ってしまったからなのではないか。  
失敗体験、挫折体験を重視し、挫折からの回復力を育てる教育が必要である。**



第II章 第1節のキーワード「レジリエンス」を高めることと関連

## 第2節 水野治太郎における「人間の弱さ」

### <人類の弱さの分類>

弱さの意味を踏まえた上で、人間の弱さを3つに分類している。

#### **(1) 「自然的弱さ」→受容すべきもの**

生き物としての弱さ。死は、生命の誕生とともに約束されたもの。生物一般に通ずる弱さを表し、肉体としての弱さでもある。

#### **(2) 「根源的な弱さ」→弱さを肯定的に捉えることにつながるもの**

生命の質を感じ取り、生きることは生かされていることであり、生きる者の責任を痛感するという意味の弱さ。これは、否定的なものではなく、受動的な意味を感得することを表す。

#### **(3) 「文明陥穽的弱さ」→知的に対処していくべきもの**

技術文明に支援されたり依拠したりした結果もたらされる、あるいは技術によって強化された弱さ。技術開発の挑戦が、新しい人間の弱さを生み出す原因となっている。

## 第2節 水野治太郎における「人間の弱さ」

### <弱さの受容（ケアの成立）>

「ケア」…他者と苦悩に共苦共感するかかわり  
→きわめて素朴で人格的意味をもつ

ケアの成立＝人間理解

苦悩するものにとってもケアする者にとっても、弱さの意味が肯定される状態を表す。

弱さの受容は社会的課題であり、弱さを単なる憐みの対象として捉えるのではなく、  
人間としての畏敬の念をもって尊重されるべきもの

今は、自己の人間的在り方が問われている。

弱さをさらけ出す自分は弱々しい存在であるが、

その弱さにひたすら向き合い、受容し、それを乗り越えてゆけることができるという確かな自分も存在することを自覚していくべき。



# **第II章 自己と他者・集団との在るべき存在**

## **第1節 人間の「弱さ」と自己理解**

- 1-1 人間の「弱さ」と自己理解
- 1-2 アドラー心理学から学ぶ自分自身との向き合い方
- 1-3 「レジリエンス」を高める
- 1-4 「挫折体験」を受け入れ、それを活かす
- 1-5 「老子」から学ぶ自己のあるべき姿
- 1-6 自分の「弱さ」を認める

## **第2節 人間の「弱さ」と他者・集団との関係性**

- 2-1 人間の「弱さ」と他者・集団とのかかわり
- 2-2 「つながり」の中で生きる
- 2-3 「よろこび」を享けて生きる
- 2-4 「共同体」の中で生きる

# 第1節 自己の「弱さ」と人間理解

＜アドラー心理学から学ぶ自分自身との向き合い方＞

## 自分自身が変わるための心理学

- (1) 自己肯定ではなく、自己受容する。
  - ・ 自己肯定…「わたしはできる」、「わたしは強い」など、自ら暗示をかけること
  - ・ **自己受容…「できないわたし」を受け入れ、できるようなるべく前に進んでいくこと**

肯定的なあきらめをし、ありのまま受け入れることが大切。さらに、受け入れるだけでは自己受容にはならない。人間は不完全であるからこそ、もっと自分を向上させたいと考え100点を目指そうとする。**その過程で変えられるものと変えられないものを見極め、変えられるものに注目していくことが「自己受容」となる。**
- (2) 優等生の追求から生まれる劣等感に価値を見出す  
不完全であるからこそ、何らかの理想や目標を掲げ、それに向かって前進しようとする。その過程で、理想や目標に到達していない自分に気づくと劣っているかのような感覚を抱く。この劣っているかのような感覚が劣等感であり、自分自身の「弱さ（欠点）」であるといえる。この劣等感は、一つの刺激として考えるべきである。なぜなら、**自分の欠点を補うために勉学に励んだり、練習を積んだり、仕事に精を出したりする姿は最も健全な姿であり、劣等感が努力や成長の促進剤となっていることを証明している**からだ。

# 第1節 自己の「弱さ」と人間理解

<レジリエンスを高める>



困難で驚異的な状況に晒され、一時的に心理的に不適用な状態を経験しても、そこから立ち直り、適応状態へと回復する過程

(1) レジリエンスを構成する要因

- ・個人の内的な要因（先天的なもの）
- ・個人の内的なもの（後天的な学習によって身につく）
- ・環境要因

※レジリエンスが高ければ高いほど、精神病理も発症しにくく、ポジティブな感情のプラス体験が増えるという効果もある。

自分の欠点や劣等感などによる自分自身の「弱さ」から、ネガティブな感情が生み出されることは避けようがない。よって、ネガティブな感情を排除していこうとするのではなく、そのような状態に置かれても、元に戻ろうとする「レジリエンス（回復力）」を高めていくことの方が重要である。



# 第1節 自己の「弱さ」と人間理解

◀「挫折体験」を受け入れ、それを活かす▶

挫折するということは、みずからの弱さを認めず、みずからの醜さを思い知り、  
時として無力感にさいなまれるということ

※挫折体験は、みずからの内にある弱さを自覚することへと発展する。

## 【先行研究】

- ①神原知愛 (2009) 「大学生の挫折経験に関する心理学的考察」
- ②姜・清沢ら(2016) 「挫折体験のとらえ方が個人に及ぼす影響について」

↓  
「失敗」と「挫折」の違いを明らかにした上で、挫折体験の受容性を指摘

挫折体験は、自分の「弱さ」と向き合わざるを得ず、自分にとって辛く苦しいもの。挫折体験から逃れることはできないからこそ、それを受け入れいることを前提とする。そして、挫折体験をどのように活かすかを重要視すべきである。

↓  
第1章 第2節、水野のキーワード「挫折からの回復力を育てる」  
第2章 第3節、中山の「レジリエンスを高めること」と関連

# 第1節 自己の「弱さ」と人間理解

＜「老子」から学ぶ自己のあるべき姿＞



**個人の人生をより充実させるためのものであり、自分らしく生きていくための秘訣**

(1) 孤独の中で人は成長する

人間が感じているであろう孤独感や劣等感、さらに自己嫌悪感について、それがむしろ人間らしい心境である。そのような時は周りに気をとられることなく、じっと自分を見つめ、自らを知る絶好の機会にすればよい。**私たちは、孤独の中で物事を考え、成長していく生き物である。**

(2) 弱さを受け入れ、弱さとともに生きる。

人間はそれほど強くない。劣等感や自己嫌悪などに陥りがちな人間の「弱さ」に注目し、「弱さ」とともに生きていってはどうかと説く。**人間の「弱さ」を全面的に受け入れることは、人として限りない成長に期待を寄せているからこそ考えられる視点**である。



# 第1節 自己の「弱さ」と人間理解

<自分の「弱さ」を認める>



**ヴァルネラビリティ＝「不確実性、リスク、生身をさらすこと」**

(1) ヴァルネラビリティを否定しない

ヴァルネラビリティは、善でも悪でもなく、あらゆる感情や気持ちの芯にあるもの。感情があるということは、傷つく可能性があるということ。**傷つくということは、人生を生きる上で大切な感情側面であり、その感情をもとに情熱や目的意識を再び燃え立たせることができる。ヴァルネラビリティを否定せず、自分のどこがどのようなにもろいのかを認識しておくことが、傷つく可能性を低くすることにつながる。**

(2) 「ひび割れの美」を知る

「ひび割れ」は、自分自身の欠けである。この「ひび割れを」自分の一部として認めるか、それを認めず自分の価値を他人に認めてもらうために駆けずり回るか。**「ひび割れの美」は、完全主義から解放し、「私はこれでよい」という自己肯定感にもつながる。**



第II章 第2節、「つながりの中で生きる」と関連



## 第2節 人間の「弱さ」と他者・集団との関係性

<「つながり」の中で生きる>



廣池千九郎『**道徳科学の論文**』…**社会と人間の関係性**

【先行研究】

岩佐信道 (2020) 「つながるいのちの豊かさのために」

**地球も人間も生命の相互連鎖である。** 社会とは、精神的相互作用を手段として共同生活を営んでいく個人の集団。私たちが、**相互依存のネットワークの一員として生きているということは、地球上の全ての存在を大切にすること**を表す。

廣池は、聖人たちの生き方に共通に見いだされる道徳性のレベルを最高道徳と呼び、5つの原理を挙げている。

※最高道徳に関する記述は、事実に基づいた記事であると述べている。自身にとって人生最大の困難に直面したときでも、自己反省し、相手や神に対して衷心から感謝していたという。

## 第2節 人間の「弱さ」と他者・集団との関係性

<「よころび」を享けて生きる>



下程勇吉『宗教的自覚と人間形成』…「つながり」を時間的要素と関連

時間は、過去と未来という「つながり」において成り立っている。

過去に対しては、感謝の念。現在においては、それ自身の充実、将来（未来）に対しては希望をもつことができる。**人間は、時間の内にありながら、ただ過ぎ行く時間に流されるのではなく、どこか時間を超えた永遠なるものに「つながる」**

続いて、「生滅的瞬間」、「時熟的瞬間」について以下のように論じている。

**「生滅的瞬間」**…人間の不安を紛らわすためにやたらと踊ったり、動き回ったりしゃべり散らす雑音の世界。

**「時熟的瞬間」**…しゃべる必要がないほど、満ち足りているという沈黙の世界

人間だけが言葉をもっているにも関わらず、言葉を超えた沈黙の世界が現れたとき、自ずと感謝の気持ちが出てくる。自分が生かされているということよりも自分はここまで連れてこられて来たという感情に最も近く、時が熟したことを表す。**過去・現在・未来が三位一体となったとき、人間の心の本体としての「よころび」が現れる。**



## 第2節 人間の「弱さ」と他者・集団との関係性

＜「共同体」の中で生きる＞



**(1)和辻倫理学「人間は根源的に個人的・社会的であり、単なる孤立人は抽象にすぎない。個人は、本質的に社会と関わらざるを得ない。」**

和辻倫理学の中で注目したい言葉→「**共同体**」

人間は、「善」の行為によって多層的な「共同体」を形成している。それぞれの「共同体」が「間柄」にふさわしい「行為の仕方」が「人倫」・「倫理」・「道」として人々のかかわりを秩序づけていて、その行為を個人が体得したものが「徳」と呼ばれる。**人間は「共同体」に生きることで「徳」を身に付け、人倫的に向上できる。**

**(2)アドラー心理学「対人関係のゴールを「共同体感覚」としている。**

ここでいう「共同体」は、家族や学校、地域社会だけでなく、国家や人類、動植物や無生物、時間軸においては過去から未来、文字通り全てが含まれる。「**わたし**」は、**人生の主人公でありながらも、あくまでも「共同体」の一員であり、全体の一部である。**相手が自分に何をしてくれるのかではなく、自分が相手に何を与えたえられるかを考えることが、「共同体」へコミットすることである。



# 第III章 道徳科で扱う人間の「弱さ」

第1節 学習指導要領における人間の「弱さ」の位置づけ

第2節 人間の「弱さ」とは何か

第3節 人間の「弱さ」を直接的に扱う授業

第4節 人間の「弱さ」を包括的に扱う授業

# 第1節 学習指導要領における人間の「弱さ」の位置づけ

| 年   | 小学校  | 中学校   |
|---|--|---|
| 1958<br>(昭和33)  | (24)誰にでも親切にし、 <b>弱い</b> 人や不幸な人をいたわる                            | 2(1)人は、生存を維持する前の生物的な欲求に動かされ、<br>また社会の慣行に盲従しやすい <b>弱く</b> てもろい面をもつが…<br>3(4)…われわれは誘惑を受ければ、悪に陥りやすい <b>弱さ</b> をもち… |
| 1968<br>(昭和43)  | (20)だれにも親切にし、 <b>弱い</b> 人や不幸な人をいたわる。<br>低学年…友達や <b>自分より幼い人</b> | 8(1)人間が、その一面にもつ <b>弱さ</b> や醜さとともに、他面に示す強さや気高さへの <b>共感と自覚</b> を通して…  |
| 1967<br>(昭和44)  | 中学年… <b>さらに弱い人や不幸な人々</b><br>高学年…だれに対しても                        |   |
| 1977<br>(昭和52)  |  | 8. … (人間のもつ強さや気高さを信頼し、誰に対しても温かく接するとともに、人間は一面において <b>弱さ</b> や醜さをもつことを <b>素直に認めて</b> …)                           |
| <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block;">小学校・中学校ともに、内容項目が4つに分類される</div> |  |   |
| 1989<br>(平成元)   | ※「弱い」という表記はない  | 3(3)人間には <b>弱さ</b> や醜さもあるが、それを克服する強さや気高さがあることを <b>信じて</b> 、人間として生きることの喜びを見いだすように努める                             |
| <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; display: inline-block;">特別の教科 道徳</div>                 |  |   |
| 2016<br>(平成28)  | [よりよく生きる喜び] 第5学年及び6学年よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じる   | [よりよく生きる喜び]<br>人間には自らの <b>弱さ</b> や醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを <b>理解し</b> 、人間として生きる喜びを見いだすこと。                    |

## 第2節 人間の「弱さ」とは何か

< 道徳科における人間の「弱さ」に着目した先行研究の比較 >

### ① 小林・田代ら(1990)「「道徳の時間」の構成への一考察」

基本的に人間のもつ弱さ、醜さ、未熟さなどを **自覚しなければならない** とし、そうした自己理解に立つてこそ、他者のもつ弱さや醜さ、未熟さを認めることができるようになる。



人間のもつ弱さや醜さを見つめることがなぜ大切なのかを理解させるために、教師は、弱さや醜さに気づかせることのプラス面とマイナス面を十分に考慮し、**プラスの面が働くように指導に当たらなければならない。**

### ② 小池順子(2008)「子どもが「自分らしさ」を追求する道徳の授業」

子どもが「自分らしさ」を追求するためには、**自分の「弱さ」と向き合うことが必要** である。子どもが「弱さ」と向き合うことは、子どもにとって厳しい営みになるが、その辛さを共有することが重要。



**現代日本に生きる子どもたちが、自分らしさに重きをおく生き方を選択しているという事象的事実から、道徳の授業の在り方を考察**



## 第2節 人間の「弱さ」とは何か

< 道徳科における人間の「弱さ」に着目した先行研究の比較 >

### ③ 笠井稔雄(2012)「人間の弱さへの共感を重視した道徳の授業」

**人間の「弱さ」への共感を重視**することで人間理解が深まり、子どもたちが“他人ごと”ではなく、“自分ごと”として考えることができるようになる。人間の本来の姿である「弱さ」やもろさに共感的な理解を示すことなく、強く生きる理想的な人間の姿だけを求めてはいけない。



**人間の「弱さ」やもろさに着目することは、生きる勇気をもらうことでもある  
というのを事実として受け止めていくべき。**

### ④ 朝倉充彦(2019)「いじめ問題を主題とする道徳教材についての考察」

『中学校学習指導要領』「11公正、公平、社会正義」に関する記述は、いじめの傍観者に向けられたものであると指摘する。いじめの仲裁者になることによって、自分も被害を受けるだろうという**不安や恐怖に挫けそうになる自分の弱さを見つめさせ、その弱さを開陳すること**が、一人ではなく集団でいじめに向かう契機になる。



**弱い心を克服し強い心をもった一人の仲裁者の出現よりも、いじめを躊躇してしまう弱い心は誰もがみなもっているからこそ、皆でいじめを止めさせようとするのが重要。**

## 第3節 人間の「弱さ」を直接的に扱う授業

### 授業実践 I

日時：令和2年7月10日（金）

対象：埼玉県三郷市立前谷小学校 第6学年2組（児童数25名）

主題名：気高い心 内容項目【D よりよく生きる喜び】

ねらい：了解と実之助の行為や心情を比較する学習を通して、人間は強さや気高さをもっていることを理解し、よりよく生きていこうとする心情を育てる。

- 教材名：「青の洞門」（出典：「みんなの道徳6年」学研教育みらい）

#### 教材の内容

過去に大きな過ちを犯す。その罪を償うために、危険な岩山の真ん中に人々が通る道を作ろうと決心する。毎日休むことなく杭を打ち続け、ついに21年後、洞窟が完成する。

#### 了海



#### 実之助



若いときの了海に父を殺される。父の仇を取ろうと20年も国々を回ってやっと見つけ出すが、哀れな姿の了海を見て、洞窟が完成するまで仇を取るのはやめようと決心する。

# 第3節 人間の「弱さ」を直接的に扱う授業

## <授業実践を通して>

### ①話し合いを通して、人間の「弱さ」を明確にすること。【図1参照】

人間は、「弱い」からこそそれを乗り越えようとする強さをもつ。よって、まずは、人間の「弱さ」は何かを児童の言葉で具体的に明らかにしていくべき。

### ②人間の強さを考えさせ、よりよく生きようとする思いをもたせること。

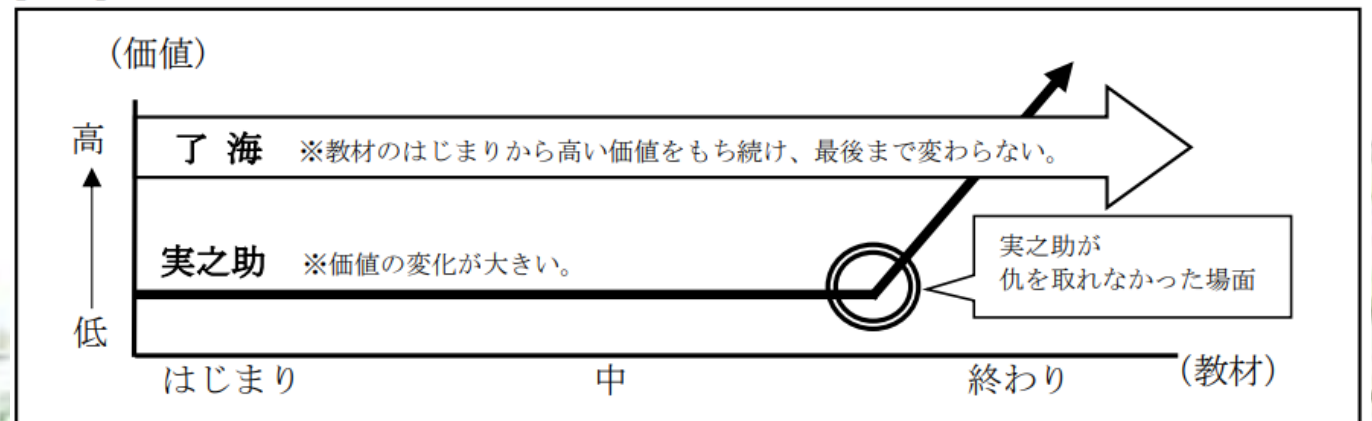
人間の「弱さ」だけを強調するだけでは、自己のよりよい生き方につなげることは難しい。『小学校学習指導要領』の内容項目D「よりよく生きる喜び」が目指すものを考えること。

### ③内容項目D「よりよく生きる喜び」は、高学年での学習課題が妥当であること。

人間としての「弱さ」を程度的なものではなく、根源的なものであることを理解させるには、高学年が妥当。

今回の改訂で、小学校・中学校の系統化が図れたからこそ、今後、意図的・計画的で確実な実践が求められる。

【図1】





## 第4節 人間の「弱さ」を包括的に扱う授業

### 授業実践II

日時：令和2年7月22日（水）

対象：埼玉県三郷市立前谷小学校 第2学年1組（児童数26名）

主題名：まよってもいいんだよ

内容項目【A 善悪の判断、自律、自由と責任】

ねらい：主人公の心の揺れ動きを考え、自分で決めて行動することの大切さを考えることを通して、よいと思うことを進んで行おうとする心情を育てる。

教材名：「雨上がり」（出典：「みんなの道徳2年」学研教育みらい）

教材の内容



公園には1本のひまわりがあり、その根元に空き缶が落ちている。

- 1日目（天気…晴れ）：主人公の女の子は、公園に落ちている空き缶に気付く
- 2日目（天気…晴れ）：まだ空き缶が落ちているので、嫌だなと感じる
- 3日目（天気…雨）：拾おうか、どうしようか迷う
- 4日目（天気…雨上がり）：ついに空き缶を拾う

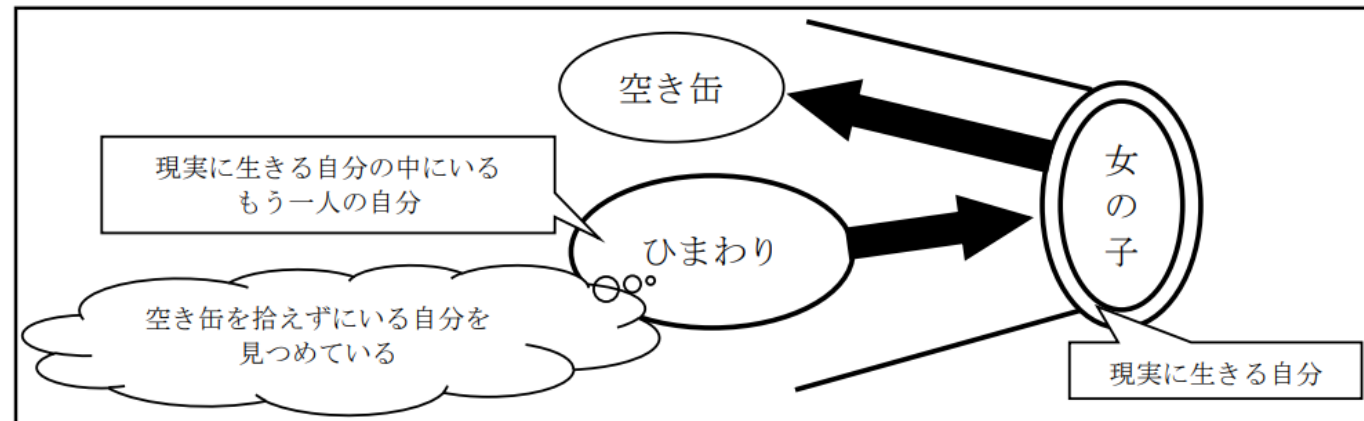
# 第4節 人間の「弱さ」を包括的に扱う授業

## <授業実践を通して>

### ①ひまわりは、自分の中にいるもう一人の自分を表している。【図1参照】

この教材は、ひまわりが登場することに大きな意味がある。4つの場面の最後の一文に着目すると、ひまわりの存在価値を確認することができる。空き缶が落ちていることに気付き、拾った方がいいと思いながらも行動に移すことができない女の子。それをにっこりと笑ってみているひまわりは、女の子の中にいるもう一人の自分であり、人間の「弱さ」を象徴している。

【図2】



ひまわりに自我関与させることは、自分の「弱さ」を見つめさせることである。自分の中のもう一人の自分を見つめさせるメタ認知へとつながる教材であるといえる。



# おわりに －研究の成果と今後の課題－

## < 研究の成果 >

### ・人間は、不完全であるということ。

誰もが生涯を通じて、自己教育に精進すべき。強さに対する安易な信仰や強さがもたらす人間の傲慢さは、多くの人にとっても陥りやすい点であり、自分自身の「弱さ」に価値を見出し出していくことが人間の望ましい姿であるといえる。

### ・人間の「弱さ」は、排除するものではなく受け入れるものであること。

人間の「弱さ」を排除しなければならないという考えは、大きな過ちである。「弱さ」にはプラスの意味が込められていることや、「弱さ」によって生じる辛い経験や挫折体験等が人間としてよりよく生きる一歩を踏み出すきっかけになりうるからだ。人間の「弱さ」を強さに変えることができるのも、人間しかいない。

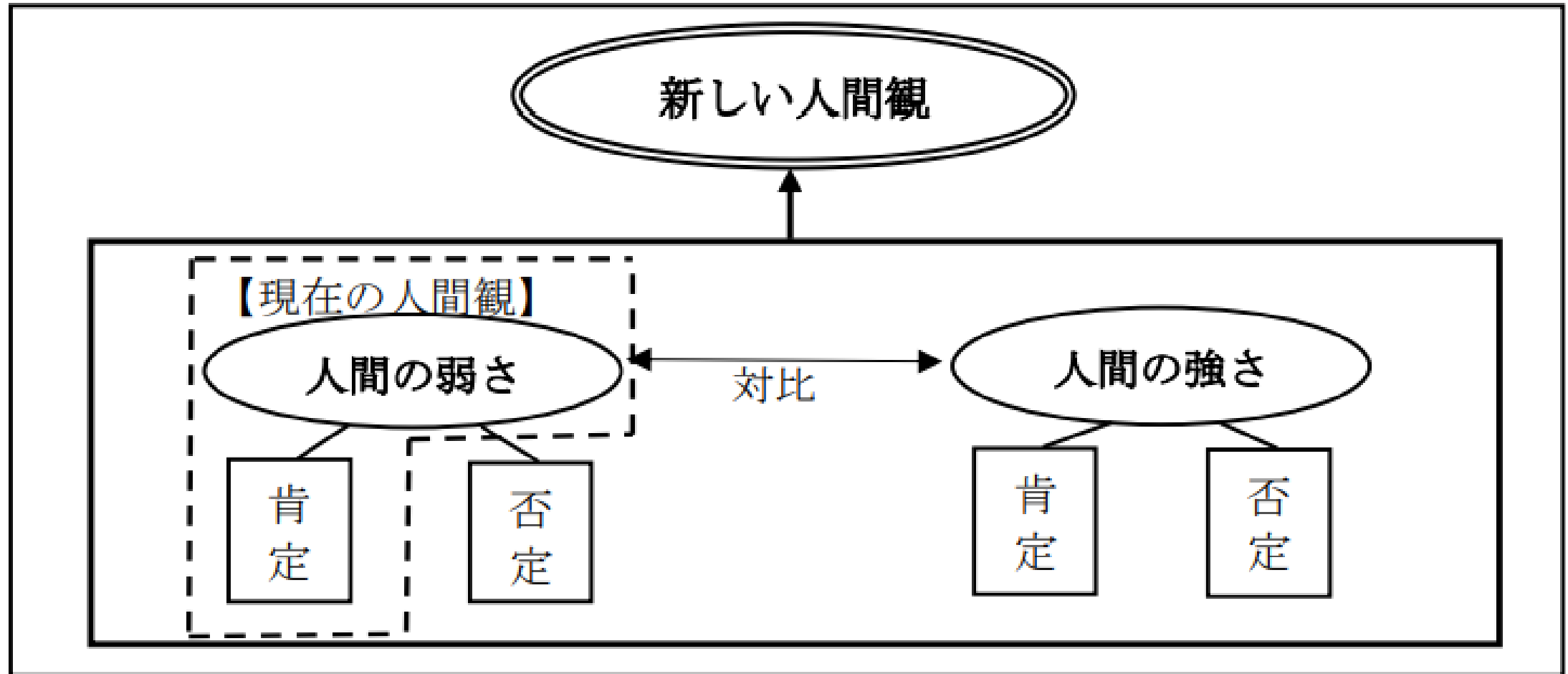
### ・自分は「弱い」からこそ、生かされているという自覚をもつこと。

人は、一人では生きられない。全てのつながりによって生かされている生き物である。そのつながりは、人間と人間だけでなく、動物や自然、宇宙規模までを表す空間的な横のつながりと、加えて時間的要素や歴史的要素などの時間的な縦のつながりによってもつながり、支えられている。自分は、共同体の一部であって中心ではない。様々なつながりの中で何ができるのかを見つけていくことが他と共によりよく生きていくことにつながっていく。



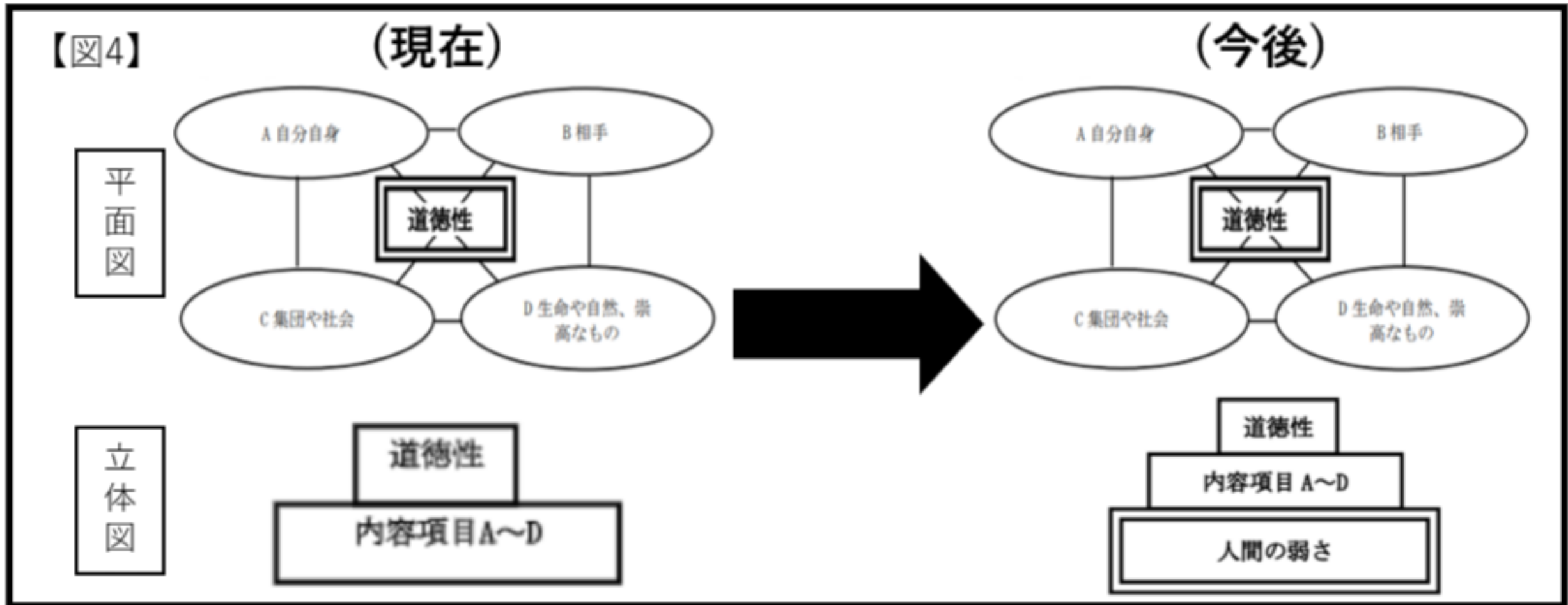
# おわりに —研究の成果と今後の課題—

< 今後の課題 >



# おわりに —研究の成果と今後の課題—

< 今後の課題 >



本日は、みなさまの貴重なお時間を頂戴し発表させていただきました。  
私個人の問いから生まれた研究が、  
みなさまの考え方や生き方の何かにつながっていたら幸せです。

神奈川（川崎）にきて2年。  
人とのつながりが広がっていくことに日々喜びを感じています。

これからも自分自身と向き合いながら、  
自分の「人生」や「いのち」に意味をもたせ  
よりよく生きていこうする道を見つけていきたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。

